

寄せたり、新たに知ることが出来る関係や事実を楽しみにしている。新世紀から始めたいのである。この登山は五年内で完了したいと思っている。

中国の名山 黄山の旅

長澤 道彦 (昭39)

去年の3月に36年間勤めた会社を辞め、さてこれから何の仕事をしようか、また山にも登りたいがどこに行こうかと考えていたが、なるべく過去の延長線上にない事をしようとした。従って仕事は長い間石油化学会社にいたので出来るだけそれとは違う分野が魅力的に見えたので、IT技術に関連した事をしようと思い、中国の無錫でシステム開発をする会社に参加する事とした。

また登山については日本の百名山を登るのもみんながやっている事であり月並みで気が進まないし、かといって困難な山や高い山にチャレンジするのも、とても今更不可能で

あるので、好きな中国の歴史に出てくる山に登ろうと考え付いた。

山を選ぶ基準は高さや、困難さや、珍しさではなく、いかに長い間人間の歴史に登場し天と地を結ぶ接点になってきたかという時代錯誤の基準に統一した。何しろ中国の山登りの歴史はたとえは中岳といわれている嵩山について言えば四千年前の夏王朝の聖なる山であり、泰山は三千年前の殷、周時代の山であり、その頃から山に立派な道を作り登っていたわけであり、せいぜい二百年ぐらいの歴史しか持たない近代登山とは比較にならない長さである。それ以来中国の老朋友たちにごんごん山が良いのかと聞いたり、歴史の本に出てくる山を比較したりして独断で下記の十名山(補欠をいれると十五名山)に決めた。

泰山(東岳)	山東省	1545米	世界遺産
嵩山(中岳)	河南省	1512米	
華山(西岳)	陝西省	2154米	
衡山(南岳)	湖南省	1290米	
恒山(北岳)	山西省	2017米	

以上の五つまでは二千年以上前から現在までその高さではなく、姿、形や歴史との係わり合いにおいて中国人にとっては一致した名山として認められている。位置的にも中華文化発祥の地を取り巻いているし四山を結ぶ平



行四辺形の中がいわゆる中華であり、中岳は中心にある。

残りの五山についてはやや異論もあるが何人かの中国人と話した結果、五山の外側でありその次に歴史の古い山に決めた。

黄山	安徽省	1860米	世界遺産
峨眉山	四川省	3100米	世界遺産
武夷山	福建省	650米	世界遺産
武当山	湖北省	2500米	世界遺産
芦山	江西省	1475米	世界遺産

補欠として(この五山については今後変更することもあるが)台湾の玉山(3945米)、海南島の五指山(1867米)、山西の五台山(3058米)、安徽の九華山(1341米)、雲南の鷄足山(3220米)の五山を追加し、二年以内に十山、三年で十五山を登

る事を目標とし、地図、案内書、歴史書等の収集と読書を始めた。

そこで早速、今後仕事をやる無錫に一番近い黄山に最初に行こうと決めて、計画がスタートした。

○

黄山は古来「黄山四絶」といって奇松、怪石、雲海、温泉で有名な場所、多くの詩人や政治家が登っている。自然の山そのものが世界遺産に指定されている珍しい場所である。ただ独りで行くには寂しいので、同じく去年会社を退職しこれから何をしようかと考えていた三森氏に話したところ、黄山のような観光地の山登りには興味はないが（彼はいたまだにアルプスの冬山に登るようなバリバリの現役登山家です）、無錫のITの仕事には興味があること、早速、すぐに話がまとまった。早速、上海、無錫から黄山登山のスケジュールを作り、どうせなら頂上まで人が連なるシーズンを選んで、もっともすいているオフの二月中旬に出发する事となった。

二月中旬に上海に入り毎年変わりつつあるこの町の活力に改めてびっくりした。50、60階のビルがどんどん増えてみんな金儲けに夢中になって働いているのは二〇年前の日本のように好感がもてる。

12月13日、無錫に車で行き今度事業に参画

する事になったITの開発会社に立ち寄り仕事の打ち合わせを行った。かつては太湖のほとりの田舎町であったが、今では東京の事務所とリアルタイムに打ち合わせが出来る、仕事の環境も何ら遜色なく整えられるのであるからITというのは革命である事が実感できる。若い中国人のエンジニアも好感がもて、必ず仕事もうまく行くだろうと三森氏と意見の一致を見た。

15日に太湖を見学し鹿頂山に登った後、最初は車で黄山までの移動を考えていたが8時間くらいかかることなので上海空港までタクシーで戻り、飛行機で黄山空港まで行く事になった。結局2時間ほど飛行機が遅れたので、空港についたのは午後9時頃で車で2時間ほど真つ暗闇を飛ばし、大きな黄山大門をくぐり温泉のある桃源ホテルに11時近くについた。

○

12月16日

朝、付近の温泉街を散歩した。桃花溪のほとりにある街で大きな岩石や山を見るための見晴台が多く建っている。この温泉は伝説によれば四千年以上前、中国最初の黄帝が発見したといわれているが、少なくとも千五百年前の唐代には温泉として有名になっていた。由緒ある重炭酸の温泉で、立派なプールもある

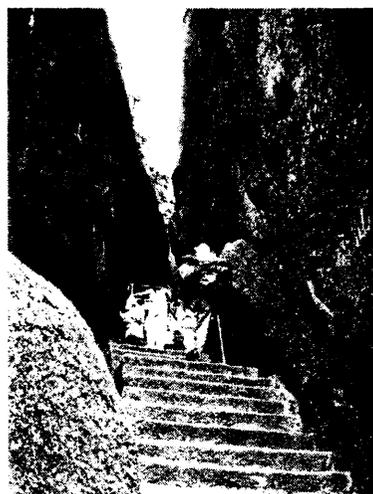
る古い施設であった。温泉の噴き出し口には天下名泉、蒸雲、不浴心不清等の字が岩に刻まれていた。

三つ星級のホテルや宿泊施設も多くあったが12月なのでほとんど人影がなかった。帽子、地図、杖等、登山に必要な品物をそろえて温泉はすれからいよいよ登りとなり山に入る。右側に人字瀑という大きな滝があるが水がほとんどなかった。

ここから石段が延々と連なっていてあがつていく。しばらく歩くと慈光閣というケーブルの終点があり入山料を支払う。荷物を運んでくれる人や駕籠かきが沢山いて大変な勧誘である。特に駕籠かきはその後、山のあちこちについて日本人と見ると「会長、会長」といつて駕籠に乗ることを勧めてくるので一度は乗りたかったが、三森氏の手前みんな断った。

ここからはただ石段を黙々とあがつて月牙亭、立馬橋まで来ると右も左も天にそびえる岩の峰が現れ、まことに壮観であった。さらに1時間ほど石段を上がると半山寺に着き、右手に天都峰の岩峰が屹立している。岩登りをする人はいそうにないが素晴らしいスラブの五〇〇メートルはあるかという岩壁である。

ここから上は右も左も後ろも岩と松ばかりで、小心坂、一心天、蓬莱三島と名前が



ついた見所がつづき石段をどんどん上がついていく。樹齡千年の一〇メートルはありそうな松が岩の間にあり歎客松、送客松等の名前がついている。獅子石、象石とか名前をこけられた奇妙な岩との取り合わせが美しい。

玉崩楼ホテルに着くと、雲の上に出て尾根歩きとなる。こんな所に立派なホテルがある。玉崩峰の上には五〇メートルもありそうな巨大な岩があり、奇松怪石とかさまざまな四字熟語が刻まれている。蒲団松、百歩雲梯を過ぎると右が最高峰の蓮花峰（1860米）左が蓮芯峰である。

登っていくと魚の背中に石段がつけられたような絶景の路で、雲の上の断崖絶壁の間に延々とつづいている。亀岩、老僧入定を過ぎると天海となり、山の中心で穏やかな場所となる。ここにも白雲ホテルという立派な国際

ホテルがある。

黄山は、天海、東海、南海、西海、北海に分かれているが、山の下にいつも雲がありピークだけが出ているので海という呼称がびつたりである。そこから少し登ると光明頂（1841米）で、眺めが素晴らしくいわゆる黄山三十六峰が雲の上に浮いているのが見える。下ると北海ホテルはすぐである。これがまた巨大なホテルで、鄧小平も泊まつたらしくて、やたらとみんなですっかり金をもうけましょうと標語が書いてあるのには感心した。

12月17日

朝早く起きて付近を散策するが天気が悪くガスが立ち込めている。獅子峰、猿子観海、曙光亭に行くが風の具合で一瞬見える事があるが、すぐ霧の中である。韓国や日本やアメリカのカメラマンがシャッターチャンスを狙って大勢夜明けから陣取っている。

朝食後、北のほうに山を降りて見ようと石段を歩き始めたが、これが大変な苦行であった。鶏公峰、青蛙峰等の間の溪谷を松谷庵まで降りたが行けども行けども石段で、上がったくるのは一〇〇キロ近くありそうな建築材を天秤棒で運んでくるボツカだけであった。さすがに万里の長城を人海戦術で作った国だけあって、山の上のホテル建設も人力で資材

を上げてしまう。我々は3時間以上の階段下りで、松谷庵に着いたところで膝が参つてしまい、その先の翡翠池や山に行く元気がなくなりケーブルの上にもどることになった。

ケーブルからの岩峰の眺めはまことに素晴らしい。丹霞峰から西海を散策していたら相変わらずの霧の中に飛來石、仙人晒靴など、立派な岩があちこちにあつたが、天気が悪かつたのと足の痛さで途中のホテルにしかけこみ長城と王朝という中国ワインをしこたま飲み沈没してしまった。

12月18日

北海ホテルを出て始信峰に登る。十八羅漢、朝南海、上升峰、道人峰など、東北方面の峰々が屹立している。足元を見ると垂直の岩壁がはるか下までつづき震える感じであるが、雲が下にあつという間に現れて海の上に浮かんだようになる。黒虎松、麒麟松等ここにも名前つきの多くの松と岩があり、見飽きる事もなく白鷺峰の下のケーブルの終点に着いた。

ここから見るとまた数千段の石段が続いているので、昨日痛めた膝がまた痛くなり、文明の利器を利用する事にした。左右の岩峰を見納めに見ているうちにすぐ雲谷寺に着いた。お寺はすでに廃寺となり何も残っていない。そこからタクシーに乗り屯溪の町に戻り明、清時代の古い町（老街）を見て、さらに最近

世界遺産に登録(2000年11月)されたばかりの古い村落をたずねた。

牌坊と呼ばれる家族別の古い大きな門が村の外に林立しており、村の中には古い民家がそのまま残って生活をしている。ここは黄山とは別に安徽の古村落ということで世界遺産になっている。まったく昔から変わらない田

懇親山行報告

日時 二〇〇〇年一〇月二八・二九日

参加者 山崎拓、丸山則二、倉知敬、三森茂充、俵昭、西牟田伸一、松尾信孝、加藤博行、佐藤活朗、近藤泰、稲毛尚之、特別参加 中島昭子夫人

〔懇親会〕

故山田亮三さんゆかりの大町エコノミスト村クラブハウスに参集し、付近の有明山や爺ヶ岳などに登ろうというのが、今回の懇親山行の趣意であり、特に故中島寛さんが最後に登った山・有明山を、丁度その三回忌にあたるこの一〇月に登って故人を偲ぼう、という意向で企画された。

二八、日午後五時、折悪しく雨模様を各々クラブハウスに集合、中島夫人も近く

舎の農村という風情であり、子供やお婆さんがいつもどおり生活している、最近の経済発展とは無縁の五百年前そのままの姿であった。もつと多くの村に行きたかったが時間がなく、せっかく友達になった村人と再会を約して飛行場まで行き、またまた遅れた飛行機で上海に帰った。

の別荘より参加された。クラブハウスの予約には奥様のお世話になるなど、いろいろお手をわずらわせることになってしまった。

夕食のあと、クラブハウスの真ん中にある、山田さんの趣向で据え付けたという大きな囲炉裏を囲んで歓談。エコノミスト村をめぐる昔からの様々な思い出やら、まだ記憶も鮮明な中島さんの数々の凄かった活躍、針葉樹会の有り様は如何にあるべきか、などといった話がつきなかった。夜も更けるにつれ、そこでは雨が激しさを増すばかりで、明日の山行は絶望的と思われたが、ともあれ予定の行動プランとしては、有明山試登の組、大谷原の故中村慎一郎君の碑訪問の組、青木湖付近の故萬濃君の碑訪問の組、の三組に分かれることになって、一同寝についた。

〔有明山探訪〕

二九日の朝、雨は小降りとなったが、止む気配もない。今回の最年長、山崎さんは、この雨ではどうも、と早々に帰宅されるというので氣勢を削がれる感あったが、行けるところまで行ってみることにして、丸山、三森、倉知の三人は有明山に向かう。松川登山口の入口まで、奥様に案内していただき、車道のつきる荒れ果てた感のある橋のところから歩き出す。中島さんの遺稿には、「しばらくは、気持ちのいい沢沿いの道を行く」とあるが、最近の集中豪雨のせい、そんな気配はみじんもなく、あたりは倒木散乱して、昔は信仰登山の表道だった面影もない。やたらにある赤テープの道標だよりに進むも、登山道でないらしく、引き返して今度は沢の中を登る。

沢は思ったより小さく、すぐに急なゴルジュ状となり、最早結構な沢登りだ。雲は重く垂れ込めているし、とても雨をおして頂上まで頑張る気概もなし、楽しく登れる雰囲気でもない、ひとりで切り切った中島さんには顔向けできないのではあるが、1時間ほど歩いたところで引き返すことにした。いず